

キャロライン王妃と貴族院の「裁判」

古 賀 秀 男

はじめに

一八二〇年一月二十九日、永らく病床にあった国王ジョージ三世が死去し、摂政を務めてきたジョージ四世が即位した。妃キャロラインは従兄妹に当たり、妃の母シャーロットはジョージ三世の姉でブラウンシュヴァイク公爵夫人であった。皇太子ジョージは、ひそかに「結婚」していたフィッツハーバート夫人をはじめ、ジャージー夫人ほか多くの女性関係がありながら、王位継承者にふさわしい公式の妃を求めていた。キャロラインはこの快楽を求める派手なジョージのもとに、一七九五年にブラウンシュヴァイクから嫁ぎ、翌年にシャーロット妃を生んだが、一八一四年以来出国し当時イタリアに住んでいた。二人の結婚はその初期から夫の愛人をはさんで折り合いが悪く、王室内の理解者は叔父ジョージ三世のみという状況であり、夫をはじめ王妃や王族から冷たくあしらわれ、やがてシャーロットとも引き離されて別居を余儀なくされた。さらに離婚の口実を探し求める夫から、一八〇五年以来繰り返し秘密の身辺調査を受け、根拠のない不当な噂が流され、平和が到来した一八一四年に追われるように大陸へ出国していたのである。その間、一八一七年十一月には、のちにベルギー王と

なるレオポルドと結婚した娘シャーロットが男児を死産して死亡し、王位継承の血脉も失っていた^①。

継承権者シャーロットの死去は、摂政ジョージの側にキャロラインとの離別の戦いに拍車をかけさせることになった。ジョージは、一八一八年八月には内密に三名からなるミラノ委員会を設け、ミラノに赴かせてイタリアとヨーロッパ滞在中のキャロラインの素行・身辺調査を行わせた。委員会はさまざまな手ずるでキャロラインに仕えていたイタリア人たちを証人に集め、あるいは買収して妃をおとしめる情報を収集し、側近の従者バルトロモ・ベルガミと彼女の「密通」を証明しようとした。委員会の報告書類「緑の袋」(Green Bag 緑の袋に入れて持ち帰ったことによる)はジョージ側近のジョン・リーチらに渡り、妃を帰国させないこと、妃の名前を国教会の祈禱書から削除し王室から排除することを内密に決め、トリーのリヴァプール首相にも伝えていた。三名の委員は上級弁護士ジョン・アラン・パウエル、勅選弁護士ウィリアム・クック、ウィーンから派遣されたウィーン大使館付き武官ジェイムズ・ブラウン大佐であった^②。

しかし、キャロラインに対する度重なる辱めと迫害が『タイムズ』などによって表沙汰になるにつれて、良識ある議員や中流階級知識人

から一般庶民に至るまで幅広い人々の間で、キャロラインへの同情と支持の熱気が高まっていた。カンタベリー大主教チャールズ・マナーズ・サトンとその息子庶民院議長サトンさえも、妃との離別を求めるジョージの要請に反対であり、閣僚にもカニングらの反対意見があったが、一八一九年六月にリヴァプール内閣は離別を認める方針を決めた。さらに即位後の二〇年二月一〇日、内閣は祈禱書からキャロラインの名前を削除することを認めたのである^⑤。

キャロラインが夫ジョージの即位の知らせを受けたのは、旅行先のマルセイユからアドリア海に臨む居住地ベサロに帰る途中のレグホルン（リヴォルノ）においてであった。執事シカードが、夫の即位を伝え、火急の帰国を強く促す理解者ヘンリ・ブルームの手紙を携えてきた。彼女はブルームとトマス・デンマンを法律顧問にというブルームの要請を受け入れ、シカードに返信を託してロンドンに発させた。王妃になるのは当然と考えた彼女は、直ちに帰国しようとはしなかった。ただし、イギリス政府からの公式の伝達がない限り、イタリアで彼女が「王妃」として認められることはなかった^⑥。

国教会の祈禱書から名前を削除し、王妃の地位を抹消するというジョージ四世とリヴァプール内閣の決定は王妃を激怒させた。ロンドンとローマの間を書面が往復したのち、彼女は急遽帰国を決意するに至った。キャロラインの理解者で彼女の法律顧問ブルームの態度も一貫せず、王の要請を受けてフランスに渡り、カレールの南セントメールで帰国途上の妃と面談した。キャロラインは国外居住を条件に年間五万ポンド支給という提案は了解したが、祈禱書からの抹消・王妃の地位剥奪には断固として応じなかった。心底からのキャロライン支持者で

あり、一足先にフランスに渡り帰国の旅の同行者となっていたロンドン市長・庶民院議員マッシュュー・ウッドは、金銭による買収などの妥協には応じずに、断固帰国して名誉を守るべきだとキャロラインに説いた。六月五日キャロラインはドーヴァーに上陸、翌日には市民たちの大歓迎を受けてロンドンに入ったのである^⑦。

王妃の帰国という事態に直面して、国王とその意を受けたりヴァーブル政府は、離婚を実現させキャロラインを王妃の地位から抹消するため、法的な手段に訴えようとする。こうして秘密委員会が設置され、キャロラインから王妃の特権を一切剥奪し、国王との結婚を解消する「刑法法案」(Bill of Pain and Penalty)を作成し、議会で早急に成立させる方針を決めた。しかし庶民院にはウッドをはじめ、国王の仕打ちに嫌悪しキャロラインに同調する議員が多く、審議しうる状況になかったので、まず貴族院がこの法案審議ないし「王妃裁判」(Trial)の法廷になった。すでにミラノ委員会で証言した多数の証人をイタリアから招き、当初は王妃も議場に出席した。王室のスクヤンダルに端を発したこの事件は、議會を巻き込み一般大衆を巻き込んだ国民的な政治社会問題となったのである。こうして生まれたキャロライン王妃をめぐる国民的興奮は、同時代人の急進派の評論家ヘイズリットをして「大衆の感情をこれほど徹底して興奮させたことは今までに覚えがない。それは国民の心の中に突然根っこ突っ込み……商売はそっちのけになり、人々は楽しむことを忘れ、食事さえ二の次になって、王妃の裁判の結果がどうなるかということだけしか考えなくなつた。……大衆の心は電撃的興奮に包まれた」と語らせたほどであった^⑧。

国王（皇太子）の愛人問題と王妃の疎外に端を発したスキャンダルが、なぜこれほど大きな国民的興奮を引き起こしたのか。その興奮を極度に掻き立てたもの、それはヘイズリットが述べているように、国王による王妃離別と王室からの排除を目指す法案を議会で審議し、王妃の「密通」を暴いて離別を正当化しようとした、史上例を見ない貴族院による「王妃裁判」にほかならなかった。この「裁判」が行われた一八二〇年八月一七日から十一月一〇日までの間、貴族院は他の議案はそっちのけにして、王妃の「密通」をめぐる計五八名の証人を喚問し、「刑罰法案」の審議に熱中した。その審議の進行は、『タイムズ』など日々の新聞に詳細に報道され、雑誌、パンフレットでも書き立てられた。ハンサードの議会討議録では同時期の議会審議全体のほぼ七〇%を占め、その分量も前後の年より一冊分多いという、前代未聞の議会となったのである。法案は三ヶ月近い審議を経た十一月一〇日、第三読会において一〇八対九九で可決はされたが、四日前の第二読会の票決では一二三対九五であった。提案者リヴァプール首相は、後述する当初の圧倒的支持からわずか九票差となった過程を省み、法案反対の空気が支配的な「世論（public feeling）を無視できない」と判断して、法案審議の六ヶ月延期＝実質的な廃案を提案し、審議の幕を閉じた。

貴族院に提出された法案とその意図はどのようなものであったのか、またいかなる証言がなされ審議が行われたのか。本稿ではまず、その状況を具体的に明るみに出すことから論述を進めたい。

一 国王と政府による王妃の告発

国民の目には長らく虐げられ不遇な境涯にあると映っていたキャロライン王妃の動静は、夫の即位によって国民的関心事になった。王妃の帰国の足取りは『タイムズ』などの新聞でつぶさに報じられ、ドーヴァー到着の翌六月六日午後、市長ウッドらに付き添われてロンドンに入ると、期待と喜びで興奮した群衆が街頭に踊り出て歓声をあげ、また王妃の馬車の後を賑々しく行進した。そのなかには威儀を正した男性や盛装をこらした女性が数多く含まれ、『タイムズ』は、「このすばらしい壮麗な行進や感動的な演劇的展覧」が、居並ぶ見物人たちに「これほど真正正銘の喜びを与えたことはかつてなかった」^①とこの光景を描写した。だがキャロラインには住居の用意はなく、ひとまずウッドの自宅に身を寄せた。国王と政府が彼女の王妃としての地位を剝奪するというニュースも広まり、王妃支持の興奮はロンドンを中心に地方にも広がった。六月半ばには近衛連隊の中で王妃支持の反乱が企てられているとの情報もあり、民衆暴動の懸念とあわせて総司令官ウェリントン公ら軍幹部や政府・当局者は神経質になっていた。^②

一八一九年はナポレオン戦争後に再出発した急進主義運動が頂点をつづいたときであった。ヘンリ・ハントらを指導者とした急進派は一九年八月一六日、議会改革を要求する大規模な集会をマンチェスターのセント・ピーター教会前の広場で開催した。運動の革命的高揚を過度に警戒した当局は、会場周辺に義勇騎馬隊と騎兵隊を配備し、ハントが演説を始めるや否や暴動法を適用して集会の解散を命じ、刀を振

りかざして群衆に襲いかかった。民衆側は死者十数人、負傷者およそ四〇〇人を出した。世に言う「ピーターラーの虐殺」である^⑧。政府当局は警戒態勢を強め、翌年初めにかけて六つの法律を制定して民衆運動の圧殺に乗り出したため、急進主義運動はしばし公然活動から地下活動に移らざるをえなかった。ハントも反逆罪のかどで二年間の禁固となった。アーサー・シスルウッドら少数の急進主義者はなお機会をうかがい、スパイ情報では政府を覆す計画を立てていると伝えられた。二〇年二月二三日、ハイド・パークの北ケイトー街の一室で彼らが集まっていたところに警官隊が押し入り、三月初めまでにシスルウッドら一八名が逮捕された。「ケイトー街の陰謀」である。五月一日の朝、シスルウッドら五人はニューゲイト監獄前の広場において大群衆が凝視するなかで絞首刑になった^⑨。キャロライン帰国の一ヶ月ほど前のことであり、キャロライン支持運動は、抑制された民衆が鬱積した不満を晴らすはけ口——より安全なはけ口——の役割を担っていたことにも注目しておきたい。

王妃の「裁判」が不可避となりつつあった段階で、後にキャロライン擁護の証言に立つ友人シャーロット・リンゼイ(元首相ノースの娘)は私信や日誌で次のように述べている。国王は、王妃が帰国するや直ちに、彼女が大陸に滞在していた時期の行状を調査したミラノ委員会の文書を両議院で検証させ、発表させる指令を出したので、王妃にとって深刻な事態にならざるをえない。だが「サイは投げられた。……このような法案が通過すれば、どちらの党派にとっても恥ずべきことになるだろう。庶民院では法案が通過することはけっしてないだろうが、貴族院では何らかの形で法案が通過することはほぼ間違いない。

い。そうならば貴族院の決定に対する国内の反発は激しいものとなるだろう。庶民たち(common people)だけでなく、中流階級(middle ranks)も、また多くの上流階級(upper class)もすべて王妃を暖かく支援しているのだから」^⑩。

王妃を擁護するブルームとデンマンは事態の円満な解決のために政府関係の有力者と折衝を続けていた。彼らは六月一日から一九日にかけて、政府側のウェリントン、内相シドマスと五回にわたり会談した。ブルームらは王妃は将来外国に永住する、祈禱書に王妃キャロラインの名前はそのまま残し海外でその肩書きを保持する、海外で暮らす王妃に適切な歳費を供与する、という案を示して協議したが、国外の公の場でキャロラインが王妃として振る舞い受け入れられることに強く反対する国王と、その条件に納得できず、いまだら出国する気持ちになれない王妃との対立の板ばさみとなり、不調に終わった。その経緯は庶民院にも報告された。国王の強い意向には手の施しようがなかった^⑪。

王妃が帰国した翌日、国王の意を受けたリヴァプール首相は直ちに貴族院において、キャロラインの王妃としての地位と特権を剝奪し国王との婚姻関係の解消を実現させる行動に取りかかった。首相は六月七日、前年の秘密ミラノ委員会による「緑の袋」の資料を調査する委員会の設置を提案し、議員一五名からなる秘密委員会を発足させた^⑫。「緑の袋」を調査した委員会は七月四日、「緑の袋」在中の資料は王妃が出国して主にイタリア在住中に、元来召使であった外国人とみだらな関係を持ったという疑惑を示している。この疑惑は王妃の名誉、国王の威厳、ひいてはわが国民の道徳感情と名誉に深くかわるもの

であり、厳粛に調査しつまびらかにすべき事柄と判断する、と議会で報告した。早くも翌五日、首相によって「王妃に対する刑罰法案」

(The Bill of Pains and Penalties against Her Majesty) すなわち

「キャロライン・アメリカ・エリザベス王妃からこの王国の王妃としての肩書き、大権、権利、特権及び免除特権を剝奪し、国王とキャロライン・アメリカ・エリザベスの結婚を解消させるための法律」が提案された。その理由は、出国してミラノ在住中に卑しい身分のイタリア人バルトロモ・ベルガミ(またはベルガミ)を近臣に取り立て、長期にわたって彼と不義密通を重ね、わが王権と王室を辱めた行いにあるとしていた。^⑤ 一方王妃からは繰り返し抗議の請願が届けられ、庶民院では、貴族院と同様な秘密委員会の設置が提案されたが、白熱した論議の末、六月二六日に一九五対一〇〇の大差で否決された。^⑥

改革派のグレイ伯は、貴族院がこのような裁きを行うことに反対する方針を述べ、法案は王妃の罪を一方的に決めつけた偏向したものであり、議会がこれから始まる裁判の告発者の性格をもつというまったく先例がない事柄である、王妃には十分な反論と弁護の機会が与えられなければならない、と主張した。リヴァプール首相は確かに先例のない方式ではあるが、王妃には反論と弁護に思ふ存分の時間が保証されるし、証人を選ぶこともできる、と答え、他方では政府案を支持する意見もあった。首相は多数の証人を外国から招くという点で先例がない、とも述べた。^⑦ その後王妃側から、十分な反論、証言の機会が保証されるべきとの強い請願が寄せられた。また重要議題の審議に入るにあたって、病氣、老齡など特別の理由がない限り全員出席すべきとの提案が了承され、チャーチル卿ほか計五二名が出席を免除された。^⑧

こうして八月一七日に審議入りとなる。

二 王妃の「裁判」——その一 国王側の証言

刑罰法案を制定する形で王妃を裁く貴族院の「法廷」は、八月一七日午前一〇時に開会、その少し後に招かれていたキャロライン王妃がレディ・アン・ハミルトン夫妻に伴われて入場し、議員一同起立して迎えた。王妃は王座の右手の席に着いた。^⑨ ブランデンブルグ・ハウスから議事堂に至る沿道では多数の市民が彼女を迎え、「ゴッド・セイヴ・ザ・クイーン」などと歌った。リヴァプール首相は法案の第二読会の日程を決める動議を提出した。これに対し直ちにレンスター公が立ち上がり、かような早い段階で審議に入ることに反対すると述べ、予定されている日程は帳消しにすべしとの反対動議を出した。議長がこの反対動議について意見を問うたところ、議場で賛成の声は弱く、反対の声が圧倒した。レンスター公は採決を求め、結局、反対動議は賛成四一、反対二〇六で否決され、審議進行となった。基本的に法案反対の立場を取っていたランズダウン、グレイら若干の議員は、もはや引き戻すことは不可能として賛成票を投じた。^⑩ これらを勘案した数字が当時の王妃問題をめぐる貴族院の色分けであったとみることができる。

王妃側の法律顧問団の非議員、ブルーム、デンマン、ラシントン、ウィリアムズ、ティンダル、ワイルドが入場し、次いで国王側の法務長官アダムと副長官パーク及びミラノ委員会のメンバーだった弁護士パウエルが入場した。初日はこのような法案の審議自体に反対するカーナーヴォン伯の演説に始まり、論議は翌一八日まで続いた。^⑪ この時

点で王妃側の予定証人一七名の名前が公表されていた。^②一八日朝、王妃側に立つデンマンの演説中に王妃がアン・ハミルトンに伴われて入場したので、演説を一時中断し、一同起立して迎えた。王妃は彼女の法律顧問団の前に着席した。^③

刑罰法案の実質審議は一九日(土)から始まる。審議入りを阻止するため王妃支持派は抵抗する。まずキングがこのような法律は現在のこの国の状況にあつて何ら必要ではない、と動議を出す、リヴァプール首相は法務長官ほかを入场させ審議を続けるという修正動議を出し、採決で後者が賛成一八一、反対六五で可決された。さらにグレイがほぼ同様の法案審議に反対する動議を提出するが、再び首相による審議続行の修正動議に一七九対六四で否決された。^④法案審議入りの時点で王妃支持が少し増え、六五人前後になっていた。法律家たちが入場し、法務長官による法案提出の趣旨説明、あるいは王妃を裁く「告訴」(charge)に入った。「告訴」は一日では終わらず、休日はさんで二日まで続いた。「告訴」ではキャロラインが一八一四年に出国して以来の足取りを述べ、一五年八月からコモ湖畔のヴィラ・デステに、一七年八月から帰国のとしまでペサロに居住していたこと、イギリスから同行した侍女、侍従を相次いで帰国させ、雇い入れたイタリア士官ベルガミとしいに親密になり、二人の間に情交があったとの証言があることなど、縷々陳述した。^⑤こうして「裁判」は証人喚問に移った。

最初は告発側の証人の喚問から始まる。その証人二六人のうちイギリス人は海軍の二人の艦長サミュエル・ジョージ・ペッチェルとトマス・ブリッグズだけで、他はすべてミラノ委員会と接触があるイタリ

アから招いた証人たちだった。喚問が始まる前に王妃が到着、一同起立して迎えた。最初の証人テオドーレ・マジヨッキは近習としてしばらくキャロラインに仕えていた人物で、ナポリ王ムラトに出仕したことがあり、近習になる前からベルガミと知り合っていたが、キャロラインに解雇された男であった。王妃は姿を見せたマジヨッキにしばし目を注ぐと、「テオドーレ、おーノーノー」(Theodore! Oh, no, no)あるいは「裏切り者」(traditore)と興奮した甲高い声で叫んで立ち上がり、アン・ハミルトンに伴われて議場から出て行った。^⑥マジヨッキはキャロラインがナポリに滞在していたとき、彼女の住居で彼女が夜中に廊下を通過してベルガミの部屋に行くのに二回気づいたこと、ベルガミの部屋に最初は一〇〜一五分、二度目は一五〜一八分位いたこと、部屋からささやきが聞かれたこと、朝食はベルガミと二人でとっていることが多かったなど、法務長官の質問に通訳を介して答えた。またキャロライン一行がジャッファやチュニスへ船で旅行したときの船室の配置図も示した。^⑦

これに対するブルームの反対尋問は、マジヨッキの証言の信憑性を確かめる意図から、彼が当時のイギリス人の近習たちについてどの程度知っているかについて詳細に尋ねた。寝室付きのレディ・シャロット・リンゼイ(その後任は後出のイタリア人オルディ伯爵夫人)、海軍士官ハウナム、ホランド医師らが同行していた。彼の証言ではあたかもキャロラインとベルガミだけが核となって生活し、旅行していたかの印象を与えたからである。イギリス人近習に関する質問には、大部分“non mi ricordo”(覚えていません)と答え、やはりベルガミとの関係のみを浮き彫りにした。ミラノ委員会で証言した際、ウイー

ンからミラノへの旅費が出ていたことも、彼が言を左右していることから理解された。^② マジョッキへの尋問は三日間に及んだが、議員の質問で注目を惹くのは、エレンバラ侯とその質問を継いだグレイによるものであった。それはベルガミの部屋に妃が行ったという彼の証言に關して彼女のときの服装を尋ねたが、またも覚えていないを繰り返して、自分は眠っていたと答えて議員の笑いを誘い、目はつぶっていたので知らない、と言いつ直した。^③ 証言の核心部分が不確かなものであることが露呈されたのである。

ブルームの強い希望でマジョッキは八月二四日と九月七日にさらに証人台に立った。ブルームは自身で調べた証拠を持って、マジョッキが昨年ハイアットに仕えてグロスターに滞在していたことを確認し、その時期に乗合馬車の中であるイギリス人にベルガミが自分の賃金を引き下げようとしていたと不満を語り、キャロラインについて「善良な女性」(buona donna)であり、だが「悪い者たち」に囲まれていると語ったという答えを引き出した。さらにすばらしい分別のある女性で、彼女の不適切な見苦しい行動はまったく見たことがないと語り、また「まことに虐げられた女性」(a much injured woman)と語ったのではなかったか、馬車の中で妃をおとしめるよう約束させられたのではないか、というブルームの執拗な質問には、“non mi ricordo”と繰り返して、前回証言したこと以上には述べていないとも主張した。^④ ブルームは彼の「善良な女性」という表現が「親切な分別のある善良な道徳的な女性」という意味であったのかどうかには疑問が残ると述べたが、証人がベルガミに不満を抱いていたことは明白になった。九月七日の喚問では、マジョッキが国王の死去前後の時期に旅

費を貰ってロンドンに来ていたこと、そのときミラノ委員会の中心だったパウエルと会っていたことが明らかになった。^⑤ 証言の作為性が問われたのである。“non mi ricordo”はときにはやり言葉となり、嘲笑の種になった。

二人目の証人ゲタノ・パトゥルゾはナポリ在住の商船の船長であり、やはりミラノ委員会の聞き込み調査に応じた人物である。証言によると、彼は三〇〇トンほどの自分の船で一八一六年にキャロライン一行をシシリ、チュニス、マルタからイェルサレムまで案内した。一行は「聖キャロライン騎士団」と称され、同行者はベルガミ、ウィリアム・オースティン(妃がイギリス在住中に引き取り、養子のように育ててきた者)、最初の証人テオドーレらであり、キャロラインとベルガミがデッキで腕を組んで歩いてしたこと、地中海では高温となったためデッキにテントを張り、妃がソファァーにベルガミがベッドに座っていたこと、当地へ来る旅費はイギリス当局の負担で自分は一切出していないし、自分の休業補償として一ヶ月につき八〇〇ドルを要求した(この金額に驚きの声が上がった)、などと述べた。^⑥ 彼の証言はさきのマジョッキの証言と重なることが多かった。

三人目の証人ヴィンケンザ・ガルギュウロは、キャロラインがチュニスやギリシアに旅行した際に乗った帆船の持ち主であり、前の二人の証人と同じ場面の情景について類似の証言をした。ベルガミがデッキの大砲の上に座っていて、キャロラインがその膝の上に座り、二人がキスをしているのを見た。それは一度だけではなかったし、またデッキを歩くとき、妃はベルガミの左腕を取っていたとも述べ、類似の証言だが一層具体的だった。^⑦ だが大砲に関する話は、後の王妃側フリ

ンの証言に出る英海軍の砲艦上のことと思われ、信憑性に乏しい。この証言に入る前に証人同士が事前に話し合うことを禁止すべきだという問題が提起され、禁止する方針が決まっていたが、事前協議をしたようであった。

第四の証人は二年足らずの間料理人としてキャロラインに仕えていたフランチェスコ・ビローロであり、やはりギリシア旅行などに行中、船のデッキで彼女とベルガミが手を取り合って歩いていた、彼女の寝室から出てくるベルガミと出会い咎められた、などと述べた。また金銭問題でベルガミに不満があり何度かいさかきがあった、とも答へ、この証言とベルガミへの反感の関連性もうかがわせた。

第五の証人サミュエル・ジョージ・ペッチェルは一八一五年当時イギリス海軍のクロリンド号の艦長で、キャロラインをローマ近くのチビタヴェッキアからジェノヴァまで運んだ、このときはイギリスから来たシャーロット・リンゼイらが同行しており、ベルガミが召使として加わっていたなど短い証言だった。

第六の証人イギリス海軍のトマス・ブリッグズは一八一五年にリヴァイアサン号の艦長を務めていた。同艦がキャロライン一行をジェノヴァからシシリーへ運んだとき、一行にはオルディ伯爵夫人、ベルガミその他が含まれ、キャロラインの希望でベルガミの船室を彼女の部屋の近くに設定した。二人が手を取り合って船内を歩いていた、食事も二人で取っていた、と証言。メッシナからの帰路はクロリンド号を使った。

第七の証人ピエトロ・ベッチはトリエステの宿屋の主人で大ホテルの代理人もしており、キャロライン一行が同地を訪れたときの状況を

証言し、やはり彼女とベルガミが手を取り合って歩いていた、と証言。ミラノ委員会でブラウン大佐やパウエル弁護士の調査を受けたことは確答したが、二人の寝室の詳細な様子は知らないと言った。

第八の証人ジェーン・バーバラ・クレスはカールスルーエ在住の二五歳のドイツ人女性、当時同地の宿屋ポスト・インに部屋付き女中（Kellnerin）として住み込んでおり、この宿にキャロラインらが一週間余り投宿したという。証人は通訳を通して夕刻七時から八時のころ、ベルガミの寝室に水を持参したところ、ベルガミがベッドに横たわり、キャロラインはその近くに座っていた。クレスが部屋に入ったときはベルガミがキャロラインの首に腕を巻いていて、彼女は急いで起き上がった、またベルガミの寝室のベッドを整えていたとき、女物の上着を見かけた、ベッドに濡れたしみがついていた、などと国王側の法務長官の尋問に答えた。ブルームは証言の信憑性を確かめるため、証人の生活実態と身辺状況について詳細に質問したが、この質問に保守派の議員から異議が出され、王妃側の反対尋問を制限すべきだという主張をめぐる論議で九一日を費やした。翌八月二十九日、事例の特殊性に鑑み王妃の法律顧問団を出席させ、その考ええるとおりに反対尋問を進める、というリヴァプール首相の動議を賛成一二一、反対一〇六の一五票差で可決した。その後クレスへの質問が続けられ、彼女はベルガミの寝室で二人を見たのちオルディ伯爵夫人の寝室に水を持参したが、そこにキャロラインもいた、さらに議員マンズフィールド伯爵の質問に対し、朝ベルガミのベッドにしみを見たが、二人が寝た跡のように見えなかった、などと答えた。

九人目の証人はイタリア系スイス人でヴェネツィアに住むジセッ

ピ・ビアンキで、ホテルのガードマン。ベルガミ、マジョッキらを伴ったキャロライン一行を二回見かけた、二回目ときは「ベルガミ男爵」と呼ばれており、二人はしばしば手を取り合って歩いていた、などと短く証言した。一〇人目の証人パウロ・ラガゾーニはヴィラ・デステの石工で二〇〇三〇人の職人を雇って仕事をしていた。彼はキャロラインとベルガミはアダムとイヴのように見え、同地の劇場で共演したこともあった、などと証言した^④。

次の証人ヴィラ・デステの庭師親方ジエロラモ・メジャニ（ヒエロニモ・ミアルディ）は、ベルガミは貧しい男だが、キャロラインに仕えてカヌーや馬車でしばしば二人一緒にいるのを見かけ、ベルガミの膝の上にキャロラインが座りキスをしていたこともあり、夫婦のように見えた、などと証言。ティンダル判事の反対尋問に対し、ミラノ委員会では自分が話したことがすでに書面に書かれており、それに署名した、立ち会ったイギリス人の一人はブラウン大佐だったなどと述べた^⑤。次の証人パオロ・オギオニは一八一七年までヴィラ・デステでキャロラインに仕えていた料理人で、キャロラインとベルガミがしばしば一緒に手を取り合って行動し、炊事場にもよく来た、地域の舞踏会するときキャロラインも二度加わったことがあるが、地域の人を相手にしては踊らず、一人で踊るか、ときにはベルガミと踊っていた、などと述べた^⑥。

一三人目のルイーザ・デュモントはボローニャ出身の女性、フランス語をしゃべる着飾った女性であり、議場の注目を浴びた。彼女はローザンヌでキャロラインに雇われ仕えることになり、侍女として以後ナポリなどにも同行した。ベルガミは廷臣としてキャロラインに仕え

ており、ナポリに着くまでは妃はオースティンと寝室を共にしていたが、一三歳になって大きくなりすぎ、近くの小部屋に移した。寝室にはオースティンとベルガミが居たことがある、ナポリ滞在中あたりから妃とベルガミは親密になった、ベルガミがシャツ以外は靴下も履かずスリッパがけで自室から出て妃の部屋に向かうのに出くわし、自分は身を隠した、妃もそのとき自室で衣装をつけていなかった、などと証言した。ベルガミと妃と一緒に食事をしていたなど、これまでの証言と共通することも多いが、英語を若干解する彼女のイギリス人同行者についての情報はより詳しく、また妃はアウグスタで彼女の肖像（トルコ女性のスタイル）を描かせたが、トルコ服を着たベルガミの肖像画も見ることがある、キャロラインはベルガミに「そなた」(tu)と呼びかけていたが、ベルガミの方は「お妃」(princess)と呼んでいた、とも述べた。しかし証人が提出した手紙によって、キャロラインに深い愛着を持つ自分がベルガミに嫌われて解雇されたことに不満をもち、ベサロにいる妹も解雇されることになり、お金がなくて困っていることも明らかになった^⑦。

次の証人ルイゴ・ガルディニはヴィラ・デステ近郊に住む石工、アレッサンドロ・フィネッティスは装飾ペンキ工であり、キャロラインとベルガミが手を取り合って歩いていた、並んで座ってベルガミが手を延ばして妃の首を抱いていた、あるいはキスをしていた、などと証言した。続いて短い証言だが、ドミニコ・ブルーズ（ヴィラ・デステ地域の石工）、アントニオ・ビアンキ（コモ地区の住民）、ジョヴァンニ・ルッチーニ（ヴィラ・デステで仕事をしてた塗装工）、カルロ・カラッチ（あるいはランカッチ、ヴィラ・デステから二年間妃に仕え

窓 た菓子屋）、フランチェスコ・ガッシノ（あるいはカッシーナ、コ

モ近郊の石工、ヴィラ・デステで一七年間働いていた）、ジセッペ・

ラステリ（妃に仕えていた配膳係）の六人が立った。彼らは妃とベルガミが手を取り合って歩いていた、乗り物にベルガミが座り、妃が膝の上に座っていた、二人がキスを交わしていた、など先の証言と共通することを述べた。^④

二人目ジセッペ・エガリ（またはガリ、ミラノとコモの中間にあるクラウン・インの給仕）は、キャロライン一行一〇名余りが夕食に訪れ、立ち去る前に妃とベルガミがキスをし、ベルガミが妃の方を抱いていた、次のジセッペ・デル・オルト（ヴィラ・デステで妃に仕えていたパン屋）は、庭でベルガミが妃を抱き、キスをしていた、ジセッペ・グルジアディ（コモ湖のボート屋）はボートで二人を劇場に連れて行った、二人が四回ほどキスをするのを見た、などと述べた。^⑤

二五人目の証人ジセッペ・サッキは一年間ヴィラ・デステなどでキャロラインに従者として仕えた男で、ベルガミと妃が手を取り合って歩いていた、二人で寝室に入り出てこなかった、二人が並んで寝込んで陰部あたりに手を置いていた、など縷々述べた。ブルームの反対尋問で、自分はボランティアではないのに、従者として安定した給与は貰えず、経済的理由のため妃から解雇され、その後は仕事がないと述べ、不満をもっていることが明らかになった。^⑥次に在英時代から妃が口座をもっていたクーツ銀行の出納係ロバート・ヘアの短い証言があり、最後に四度テオドレ・マジョッキが召喚されブルームらの尋問が行われた。彼は読み書きができない（自分の名前ぐらいしか書けない）ことがわかった。^⑦

告発側の二六人の証人喚問は王妃キャロラインとベルガミの親密ぶりと密通を思わせる多くの証言を引き出して終わった。証言から明らかのように、主な証人たちは従者、料理人など何らかの形でキャロラインに雇われたか出仕していた者であり、解雇や低報酬などでベルガミとキャロラインに金銭的に不満をもつ者たちであった。証言内容の多くはたちまち戯画化され、多くのパンフレットや雑誌に掲載されて広まった。しかし議会において、現王妃についての、このような不透明な嫌悪をもよおす不快な「密通」の次第が事細かに話されるのは前代未聞のことであり、国王の明らかな無理押しに、リヴァプール首相（伯爵）と貴族院はまさに良識を失っていたのである。一方、キャロラインを虐げる原因となった国王の大っぴらな女性関係や「密通」は何ら問題とされなかった。院外においては、貴族院の「裁判」が始まるとキャロラインを擁護する急進派や一般民衆の興奮は極度に高まり、彼女が最初に貴族院に出頭したとき、ハーマスミス地区からウェストミンスターに至るまで彼女を歓迎する群衆が街頭を埋めつくし、彼女の馬車の前後には群衆が列をつくり、「ゴッド・セイヴ・ザ・クイーン」と歓声をあげながら進んだ。当局は数百人の特別警官を道筋に配置した。刑法法案の審議の停止と廃案を求める数多くの請願が各地のグループや団体、女性グループから両院に寄せられた。また八月初めからの彼女の住居ブランデンブルグ・ハウスの周囲は王妃を支援する群衆が連日集まった。なかでもとくに象徴的だったのは数千人からなる海軍の水兵や商船の船員たちが、王妃支持の意思表示のため水路と陸路でブランデンブルグ・ハウスに集まってきたことであった。^⑧

三 王妃の「裁判」——その二 王妃弁護側の証言

国王側二六人の証言は九月七日にすべてを終り、法務副長官はそれらの証言を要約し、法案を支持する証拠は整ったと述べた。議員の中にはもはや王妃側の反証や弁論の必要はないといった一方的な意見を出す者もいたが、リヴァプールは翌八日、王妃側の法律顧問団の希望があれば、例証したいと考える証拠資料を示して審議を進めるよう提案した。ブルームら法律顧問団はその弁護の準備のため若干の時間が必要と主張し、三週間後の月曜日一〇月三日にブルームの弁論から始めることになった。その弁論の中でブルームはキャロラインの嫁入りのときから説き起こし、故人の首相ビット（小）、同パーシヴァル、ホイットブレッドら有力政治家が王妃を支持していたし、今回の証言は肝心のところで不明なことが多く、また「覚えていない」を繰り返すなど、法務副長官が理解したほどには信憑性がない。ナポリではイギリスからシャロット・リンゼイ、シャロット・キャムベル、フインチなどの貴婦人たちが王妃の旅に合流しており、イタリア人の召使たちが述べた現場にいたはずである。王妃の近習だったマジョッキの証言も肝心なところで不鮮明であり、“non mi ricordo”を繰り返す仕末だった、と力説した。このようなブルームの弁論は翌日まで続き、その中で一八〇四年一月一日付けの岳父ジョージ三世の愛情あふれたキャロライン宛ての手紙も資料に提出した。^④

ブルームに続いて弁護団のウィリアムズが弁論に立ち、翌五日まで論陣を張り、寝室におけるキャロラインの様子を説明しながら、妃が着ていた衣装を覚えていないと述べたデュモントの証言の信憑性は認

められない、などと論じた。^⑤ この日の午後から弁護側が準備した証人への尋問が始まった。

最初の証人ジェイムズ・レマンは、王妃の指示により、証人としてバーデン大公の侍従を当地に招致する書簡を持参してカールスルーエまで行ってきたが、大公に拒否されたとのみ述べた。^⑥ 第二の証人アントニー・ブラー・セント・レガーは一八〇九年から一八一九年まで王妃の侍従を務めた人物だが、大陸へは最初のブラウンシュヴァイクまで同行し、そこで妃と分かれて帰国した。その後体調をくずしていたなど簡単な証言であった。^⑦

次に証言に立ったギフォード伯（五代伯、本名フレデリック・ノース、父は首相を務めた）は一八一五年三月にナポリでキャロライン一行を訪ねてしばらく同行し、その後同年一月に短期間ヴィラ・デステに訪ねて妃と会った。ナポリでは一行はレディ・シャロット・フオーブス、ウィリアム・ゲル、ケッペル・クレイヴン、医師ホランドら英人であり、従者としてベルガミも見かけた。一月にはヴィラ・デステで妃と一緒に食事をしたが、ベルガミも同じ食卓にいた、と証言した。法務長官の反対尋問に対して、ギフォード伯の妹シャロット・リンゼイは自分より一足遅れて一行に加わり、寝室付きの役を務め、一八一七年五月初めに自主的に辞めたこと、その後任はイタリア人のオルディ伯爵夫人が務めていた、ヴィラ・デステで妃が男と手を取り合っ外を歩くなど見たことはないが、ボートにベルガミと一緒に乗っているのは見かけた、彼は漕ぎ手であり、妃に対する見苦しい行いなどまったく見なかった、と述べた。^⑧

第四の証人グレンバーヴィ卿は、妻のレディ・グレンバーヴィ（ノ

ース元首相の娘）が、以前にキャロラインの寝室付きを務めていた関係で、ジェノヴァで妃一行を迎えたとき、正式の寝室付きのレディ・シャーロット・キャムベルが到着するまでの間、その役を務めた。ベルガミは召使い（servant）の服装をしていたかという反対尋問に対し、従者の服装をしており一種のスペイン服だったと答えた。^④

レディ・シャーロット・リンゼイ（前出ノース元首相の娘）が次の証人である。証言によれば、彼女は一八〇八年に最初にキャロラインに仕え始め、妃が一四年に大陸へ渡ったときにブラウンシュヴァイクまで同行した。その後一八一五年三月にナポリで妃一行に加わり、一七年に辞めるまで寝室付きを務めた。ベルガミとはよく会っていたが、彼は従者であり、自分と妃が外を歩いているときは少し遅れて歩いていた。反対尋問に対し、妃がベルガミと手を取り合って歩いたなどまったく想い起こすことはできない、と繰り返した。またベルガミが寝室にいたのではないかという問いに対し、われわれは寝室で食事をしていたので、彼も寝室にいた。私は妃とウィリアム・オーステインの三人で食事をし、通常ベルガミは召使いとして後ろに侍っていた。少なくとも私が妃と同行していた間は、ベルガミはあくまで従者（counier）として行動しており、またベルガミの妹がナポリで妃に仕えたとか、彼の弟や母親も仕えていたということはまったく知らない。ベルガミの子供（妃が生んだ？）など見たことはない。妃は上流階級にふさわしい行いをしており、不謹慎なことはなかった、と繰り返した。^⑤

次の六人目の証人ランダフ伯は夫人とともに一八一五年一月からイタリアに滞在し、ナポリやヴェネツィアでも夫妻でしばしば妃と会

い、食事を共にした。妃は王族にふさわしい立ち居振舞いだったし、祖国に不名誉となるようなことはなかった。当時名前は知らなかったが、ベルガミは確かに妃に仕えていたと証言した。^⑥ 次の証人ケッペル・クレイヴン閣下は王妃の侍従として宮廷服姿で出席。彼はブラウンシュヴァイクで妃に合流し、以降ミラノからナポリまで侍従として同行した。妃はミラノで一人の従者を不行跡のため解雇したので、その後任の推薦を証人がオーストリア皇帝の侍従長に依頼し、ベルガミが推薦されてきた。ナポリで証人や近習のウィリアム・ゲルがいる部屋にベルガミがきたことがあるが、彼は椅子には座らなかった、などと証言した。^⑦

第八の証人はキャロラインが大陸へ出発する一ヶ月前から侍従を務めているウィリアム・ゲルである。彼は次のように証言した。彼はベルガミについて推薦者オーストリア皇帝の侍従長から、ベルガミ家はフランス革命によって財産を失ったが、立派な家系の出であり、妃に仕えれば必ずや立派な働きをし昇進するだろう、との推薦を受けた。また自分はパレスティナに向かう妃とナポリで分かれたが、その理由は私の通風もちを妃が気遣ったことだった。その後も妃とはたびたび会い、多くの高位の人々が妃の許に訪れていたことを知っている。自分は三ヶ月間、妃たち一行と一緒に暮らしたが、妃とベルガミの間に不適切な関係があったなどとはまったく考えることができない。妃がベルガミと会話を交わしたのは仕事上のことだけで、それ以外のことはなかった。^⑧

次の証人ウィリアム・キャリントンは前の証人ゲルの近侍であり、海軍見習士官になるまでの九年間その仕事にあった。一八一四年末に

ナポリでその仕事につき、妃の邸に住んだ。ベルガミも一行に加わっていたが、彼の寝室と妃の寝室は六〇フィート離れており、その間にオースティン、ヒエロニムス、ホランド医師の三室があった。妃が仮面舞踏会を催したことは覚えていたが、召使いたちが特別な装いで参加したという話は知らない。また告発側の第一証人マジヨッキのことも覚えていたが、彼がオムテーダの名前を口にするのを聞いた、とも述べた。そのハノーファから派遣されていたオムテーダ男爵について、王妃の弁護士ラシントンがたたみかけて尋ねると、法務長官ら国王側がストップをかけ、中断して議論になった。ラシントンはオムテーダが妃に対するスパイとして行動しており、妃の召使いたちを威嚇して、妃の私的な保管庫をこじ開けさせるなどしたことを明白にすべきだと引き下がり、マジヨッキとキャリントンを改めて喚問することになった。マジヨッキはまた「覚えていない」を繰り返し、ゲルの召使いに会ったことはあるが、オムテーダがした行為についてその召使いに語った覚えはない、と主張した。一方キャリントンは、オムテーダが妃の部屋のかぎを盗むため、御者と侍女を雇った、そうした動きのため、妃に雇われていた召使いが一人解雇された、とマジヨッキから聞いたと述べた。妃の身辺調査をしていたオムテーダの件はイタリア人召使いたちの間でしばしば話題になり、みなよく知っていたとも述べた。

一〇人目の証人ジョン・ウィットコムはさきに証言に出たケップル・クレイヴンの近侍であり、ナポリのキャロライン邸の寝室についてキャリントンと同様な証言をした。次の証人ジョン・ジェイコブ・シカードは二一年近く料理人として王妃に仕えており、もと外国人だ

が帰化した者。ナポリにおけるキャロラインの生活について他の王妃側の証人と共通することを述べた。

次の証人ホランド医師は妃がナポリ滞在中からその後ローマ、ジェノヴァ、さらに船でクロリンダに行ったときまで、同行した。彼の証言。私はベルガミが妃と一緒に食事をしたことなど見たことはない、二人の間は女主人と召使いの間柄であり、他の召使いの場合と同じであった。自分が妃に同行したのは二年足らずであるが、妃はナポリではイタリア人とイギリス人からなる多数の高位高官者の訪問を受け、ジェノヴァでは同地に滞在していたすべてのイギリス人の訪問を受けていた。

一三人目の証人チャールズ・ミルズはローマ在住者であり、一八一七年から二〇年までしばしば王妃と会っていた。ベルガミは侍従を務めており、その立場で妃の食卓に座っていた。二〇年二月に王妃になつてからも会ったが、王妃とベルガミとの関係はまったく変わってはいなかった、と述べた。次の証人ジョーゼフ・テオリニはイタリア総督の下にあった元騎兵大佐であり、ベルガミについて誠実で信頼できる人物と証言した。

一五人目の証人カルロ・フォルティは元イタリア総督の配下にあった軍人、一八一七年にミラノでキャロライン一行の護衛従者となり、王妃がイギリスに帰国するまで同行した。彼は通訳を通じてほぼ次のような注目すべき証言をした。ミラノからローマへ移動したとき、一行は妃が乗る四輪馬車と他の二台の馬車からなり、自分はひとりだけ騎乗して脇を進んだ。妃と同乗したのは三人で、一番左にベルガミ、中央にオルディ伯爵夫人、右に妃が座り、ベルガミ夫妻の子ヴィット

リンは妃かオルディの膝の上にいた。ベルガミが退出するときに妃の手にキスすることはあったが、二人がキスをするなどまったく見たことがない。ベルガミは王妃が帰国するときセント・メールまで同行した。自分はベルガミの妻がこの一行に加わったのをみたことがない。

彼女はミラノ近郊に男の召使いと女中とともに暮らしており、ベルガミが妃一行とともにベサロにいたとき、自分は彼の手紙を届けに彼の妻の家にいったことがある。オルディ公爵夫人は彼の妹であり、ベルガミの弟ルイスもローマへ移動する一行に加わっていた。また問いに答えて、ベルガミは妃に対して丁寧な言葉遣いをしていたと述べた。

フォルティはキャロラインの帰国まで付き添っており、その証言は具体的かつ説得的だった。同行者として再々登場するベルガミの妹オルディ公爵夫人とは旧姓アンジェリカ・ベルガミと言い、ヴェネツィアの貴族に嫁いでいたが、夫は没落し宿屋経営で生活していた。^⑤ベルガミの母もヴィラ・デステにときどき姿を見せたので、妻を除いて一家でキャロラインに仕えていたと言える。

次の証人イギリス海軍将校ジョン・フリンは一八一五年当時メッシナに駐留しており、妃一行をシシリーからコンスタンティノープル方面へ彼が指揮する砲艦で案内した。国王側証人たちが、船のデッキで大砲の上にベルガミが座り、その膝に妃が座っていたなどと述べた旅行である。フリンは、暑いので妃がデッキにテントを張って過ごしたこともあったが、大砲の上にベルガミが座ったことも、その膝に妃が座ったこともまったくなかった、二人が同じベッドで過ごしたことなくありえない、また入浴の桶は大きくて妃の船室には持ち込めないと述べた。^⑥次の証人ジョン・ロバート・ハウナムも海軍大尉で一八一五

年四月にジェノヴァから妃の一行に加わり、前証人フリンとともにコンスタンティノープル方面へ同行した。証言も共通部分が多かったが、ヴィラ・デステの生活でキャロラインが大きな舞踏会を催したとき（他の証言にもあった）、ベルガミの弟がイタリア喜劇のハーレキンを演じ妃がその愛人コロンバインを演じたのか、との問いに、ベルガミの弟のハーレキン役は間違いないが、妃の役については記憶がないと繰り返し、妃が機械人間の役をしたことは明言した。ベルガミと妃がキスをしたなどまったく見たことがない、と断言し、反対尋問に對しても、ベルガミやその弟、母親が妃と一緒にテーブルで食事をしたとしてもそれが何ら問題になることではなく、ベルガミは妃の召使いの立場を忘れることはけっしてなかった、と力説した。^⑦だがハウナムの証言の後で、日記作者グレヴィルは「偏見のない者すべてが密通は十分に証明されたと考えているようだ」と記した。^⑧

次のグランヴィル・シャープの証言はインドのダンスに関するほとんど意味のないものだった。一九人目のサンティノ・ギガリはヴィラ・デステの仲買商で、労働者の監督、毎土曜日の賃金支払いの責任者であった。国王側の証人になった数人の職人を知っていると述べ、アダムとイヴの話があったが、ヴィラ・デステの岩屋のなかにアダムとイヴの像が置かれていたと証言した。^⑨次の石工親方ジセッペ・ジラローニもヴィラ・デステでよく似た立場にいた人物であり、弁護士はその尋問において、国王側の証人ラステリが王妃に不利な証言をする者に金銭を出したという疑惑を証明しようとしたが、法務長官らの反対もあり、またラステリがすでに次の証人パウエルの指示で帰国の途についていたため、追求は途中で終わった。^⑩ミラノ委員会で重要な役

割を演じたパウエルに対する尋問ではブルームらは気乗りせずに終わった。ラステリに与えたパスポートについて外務省職員ジョウジフ・プランタが証人に立ち、「王妃の告発にかかわる」従者として発行したと述べた^⑧。

次の証人フィリピン・ボミはヴィラ・デステに近いパローナに住む大工、同地にベルガミの家と彼が経営するパブがあり、ロジーナという女性に経営させていた。今もベルガミはパローナに住んでいる。ボミの証言で注目されるのは、ラステリに関するものだった。ラステリはボミに言った。「君が望むなら男にしてやろう」と。その意味を尋ねると、彼は「君はこの家にずっと住んでいるのだから、妃に不利な証言ができるだろう」と言ったので、私は「これだけ良いことをしてくれた妃に不利な証言などまったく持っていない」と述べた^⑨。

次の証人サー・ジョン・ペレスフォード少将は妃が乗った軍艦ボアティエズ号の艦長。妃と同行していた仲間についての短い証言だけで終わった^⑩。

次の証人ボンフィグリオ・オマーティは、ミラノにある妃の法的代理人の下で働く事務員である。彼はミラノ委員会に協力したヴィルマルカルティから妃からの文書を提出せよと言われ、渡してしまったのだが、そのいきさつを問ひ正そうとする弁護団を国王側がさえぎり、紛糾した。弁護団は重要な書類が国王側に買収されたことを追及しようとしていた。再会された尋問の中で、証人は書類を七〇八回手渡し、代わりに額は不満だが六回金銭を受け取った。また警察官の職を世話すると言われたなどと述べた。この間グランヴィル・シャープによる前の証言に出たトルコ風ダンスの説明のほか、海軍省のサミュエル・

インマンによる先の証人キャリントンの乗船記録が提出された^⑪。

次の証人アントーニオ・マイオニはヴェネツィアから来た元警官であり、ミラノ委員会にザングラによって呼び出された人物。王妃の弁護団はミラノ委員会が証人たちを買収して、王妃をおとしめる陰謀を企んだのではないかという点に絞って質問した。委員会の協力者ザングラはマイオニの旅費を支払い、ほかにナポレオン金貨を大きな手一杯もっていたと証言した^⑫。ローザンヌに住む文学の教授でイタリア語とラテン語を教えている証人ドミニコ・サルヴァドーレも、一八一八年、ミラノ委員会の協力者サッシとキャロライン妃をおとしめる問題で話したことがあったと証言した。サッシを委員会の手先とする見方に国王側が反発し、採決によって尋問は打ち切られた。しかしミラノ委員会の性格をめぐって激論があり、再度パウエルを尋問することになった^⑬。

次の証人アレックスサンドロ・オリヴェイラは一八一六年からフランス陸軍の大佐の地位にあり、一六年末にキャロライン妃に紹介され、以後、初期は断続的に妃に仕え、一八年一月からベルガミと二人で侍従の役目を果たした。ベルガミは妃の召使いとして振舞っていた。移動の馬車には先の証言のとおり、妃、オルディ公爵夫人、ベルガミと幼いウィットリンが同乗していたと述べた^⑭。

次の証人トマス・ラゴ・マッジョリが出る前に、妃一行がイエルサレムに行ったときに命名していた「聖キャロライン騎士団」の証書をハウマンが提出し、ミラノ委員会に関して、証人ラステリの帰国を認めた状況を伝える手紙等がパウエルによって提出された^⑮。マッジョリはコモの町の漁師、コモ湖のボートマンとして妃に雇われ、コモから

湖を渡ってヴィラ・デステまで二〇回位妃とベルガミラを乗せた。その船にはコモの役人や楽師も乗っていたし、妃とベルガミがキスをするなどありえなかった。証人は妃がコモ湖畔を離れた後の一八一八年からまた従者として仕え、今年六月のセント・メールまで同行した。妃がミュンヘンでバイエルン王と食事をしたとき、ベルガミも同じ食卓に着いていた。尋問に答えて、妃とベルガミの間にいかがわしい関係はまったくなかった、と声を張り上げた。

立派な口ひげを生やした証人カルロ・ヴァッサリ騎士は、現在王妃の馬係を務めているミラノ生まれのカトリックである。とくに一八一八年から妃一行と行動を共にし、旅行や移動の際の妃が乗る馬車の座席など先の証言と同様な内容が述べられた。ベルガミは妃一家の監督の役目を背負い、従者の雇用と解雇も彼の仕事だった、と述べた。最後の三二人目の証人フランセッティ・マルティニ夫人はマウジュで婦人帽子屋を営んでおり、先の国王側の証人ルイーザ・デュモン夫人は若いころからよく知っている。彼女は私の質問にキャロラインの行いについて悪いことはまったく知らないと答えた。デュモントの答えを正確に言えば「それは中傷以外の何ものでもない、彼女の敵たちが彼女を破滅させるためにつくった中傷です」であった。証人は夫と一緒に当地へ来ており、その費用として七〇ポンドを貰った。

最後に国王側の証人リヴァプリアサン号の艦長トマス・ブリッグズが再度呼ばれ、ベルガミの地位が一八一五年一月ごろから変わり、妃と同じ食卓で食事をするようになったことを述べた。一〇月二四日、中断をはさんで二ヶ月を超え、正味五週間に及んだ証人の喚問調査は終了した。デンマンは証言を総括して、前半の国王側の証言は後半の

証言によって覆されたことを縷々述べ、国王側の証言はつくられたものだと言張した。

しばらく討議が行われた後、一月二日に刑罰法案の第二読会の採決が提案され、興奮した論議が数日続いた。こうした法案を提出して制定しようとする考え方は国制上正当化されるものではない、と当初から考えてきたグレイは、「覚えていない」を繰り返したマジックや、デュモント、サッキラの証言がいかに信憑性がなかったかを改めて確認し、証拠の点からも法案は支持できないと述べ、さらに力説した。われわれはそれがたとえ安っぽいものであっても、「院外で支持されている意見をまったく考慮せずに事をなすことはできない。……もしこの貴族院で可決されたとしても、庶民院で法案が否決されるならば、いかに厄介なことになるか」についても、十分考慮すべきだ、と。リヴァプール首相はグレイの意見を尊重しながらも、法案採択を支持する立場を述べた。第二読会の採決は六日に行われ、一二三対九五の二八票差で可決された。その後の議論の過程で法案の離婚に関する条項を削除する提案が出て、採択により提案が否決された。一一月一〇日、リヴァプール首相によって第三読会の採択の動議が提出され、一〇八対九九の九票差で可決された。この結果を見て、首相が同法案の六ヶ月間の延期・廃案の動議を出し、満場一致で採択され、先例のない王妃排斥の「裁判」は幕を閉じた。

む す び

さきに六日の第二読会の採択結果を聞いたキャロラインは、理解者のデイカー卿を通じて貴族院への抗議文を提出し、その中で王妃に敵

対する票を投じた議員には国王側の証言だけは全部聞き、王妃側の証言には欠席した者もいる。「私は神の前で、自分にかけられている容疑について、まったく無罪だと主張する。私は変わらぬ確信をもって、この前代未聞の調査の最終結果を待っている」と冷静に説いていた。その最終結果を貴族院内の一室で聞いたとき、彼女は「何を言われようと王妃はいぜんとしてここにいます」と激しい口調で述べた。ブランドンブルグ・ハウスへ帰る彼女の馬車の後に祝賀の行列が続ぎ、車にぶら下がる者もいた。キャロラインは「裁判」の期間中、セント・ジェイムズ地区に借り住いを設け、「裁判」が行われる日にはほぼ毎日議事堂に足を運んだ。マジックと対面して以来、議場には入らず別室で待機することが多かったが、辱めを受け屈辱を味わされ耐えがたい日々であったに違いない。彼女は貴族院に対し繰り返し抗議の請願を送っており、それが議場で読み上げられてはいたが、それ以上には進まなかった。

「裁判」の成り行きをかたずを飲んで見守っていた改革派の市民は、一挙に緊張が解け、街頭で歓喜の声をあげ、家々から“God save the Queen”の聲が繰り返して響いた。シェイクスピア劇を観ていたドナルド・レーンやコヴェント・ガーデンの劇場でも、王妃側の勝利のニュースが伝わると、観劇そっちのけで歓喜があがった。以後三日間、ロンドン市中には灯りがともされ、ピカデリーのバブから旗も翻っていた。その地面に描かれた絞首台の下に、「何のためのものか？ 覚えていない (Non mi ricordo)」と書かれていた。興奮は地方各地にも広まり、王妃祝賀の歓声が普通は静かな町や村にもとどろいた。当時ケンブリッジの学生だった歴史家トマス・マコーリも「王妃は救

われた」と歓喜した一人であった。ウィリアム・コベットはキャロラインを支持し続けた代表的ジャーナリストの一人であるが、その娘アン、息子ジョンも熱狂的な支持者だった。ジョン・コベットは、王妃の主義は「国王、政府、及びすべての官僚、聖職者、牧師」に反対すべく「あらゆる民衆」を駆り立てたのであり、まさに「王妃は急進主義者」である、と述べた。だが彼女は真実の急進派ではありえなかった。

一月二十九日、「虐げられてきた王妃」の勝利を祝賀する感謝の集いが、王妃と王妃を支持する市民・急進派によってセント・ポール大聖堂で催された。ブランドンブルグ・ハウスからシティに至る道筋には多くの人々が立ち並び、ハイドパーク・コナー周辺は群集がひしめいていた。シティに入るとウッド市長が付き添い、大聖堂内にはウッド市長夫人はか着飾った女性など中流階級の男女が集まり、議員ではジョウジフ・ヒューム、ジョン・ケム・ホブハウスの急進改革派が王妃を歓迎した。この時点が「キャロライン・フィーヴァー」の頂点であった。国王と政府側が表立った動きを控えるようになり、翌年に入ると民衆側の熱もさめ、キャロラインの健康も悪化し始め、年金五千ポンドの代わりに国外に住むという提案を受け入れる方に傾いていた。

ここで注目したいのは、法案廃棄の動議が首相から出たとき、グレイが表明した見解である。彼は政府がこの問題で取ってきた方針を批判し、議会は「課せられた義務を放棄し、……一方に偏した証拠のみを取り上げ、誇張した根拠のない罪人呼ばわりに信任を与えようとした。そのため何ヶ月の間、国民を運動に駆り立て、その結果公的及

窓 び私的なビジネスの広範な停滞を招き、国内の平和と平穩を脅かす敵

史

対者たちに最も都合のよい好機を与えた。政府は国王を裏切り、王妃を辱め、いやというほど聞かされた嫌悪をもよおす不快な証拠が議会に提出されることによって、社会のモラルに衝撃を与えた」と述べた。さらにミラノ委員会が「真実を調べ出すのではなく、有罪にする証拠を見出すために」行動し、「イギリス王妃の名誉と名声をおとしめる資料を作り出した証人や代理人による物語」にあまりにも信頼をおいたことに、大きな責任があると批判した。^⑧グレイが示したこの総括的見解は、四日前の演説と合わせて、後に第一次選挙法改正を実現に導いた政治家の見識を示したものである。

キャロライン事件を論じた多くの著書、論文はすべてこの王妃「裁判」に言及しているが、その多くは前半の国王側の証人たちが議会の場で語った、キャロラインとヘルガミの間の誇張された衝撃的な「密通」の話に振り回され、冷静な視点を見失っているものが少なくない。スミスの客観描写の公正さと比べて、フルフォードの著書はその好例と言えるかもしれない。^⑨キャロライン「裁判」はイギリス貴族院の不名誉に大いに貢献した。最後の追い詰められた段階で陪審に踏み切ったリヴァプール首相の決断によって、その不名誉はかろうじて救われたのである。

註

① キャロラインの「裁判」、キャロライン事件、あるいはキャロラインの評伝に関する著書として次をあげておきたい。

F. A. Smith, *A Queen on Trial, The Affair of Queen Caroline*, Allan Sutton, Stroud, 1993, pp. 14-22, 29-32. Flora Fraser, *The Unruly Queen, The Life of Queen Caroline*, Macmillan, London,

1996, pp. 342-363. Thea Holme, *Caroline, Biography of Caroline of Brunswick*, Hamish Hamilton, London, 1979, pp. 189-192. Roger Fulford, *The Trial of Queen Caroline*, London, 1967, p. 37ff. Howard Cox, *The Stranger in the House, A Life of Caroline of Brunswick*, New York, 1940, p. 221ff. Joseph Nightingale, ed., *Memoirs of her late Majesty, Queen Caroline*, 3 vols., London, 1820-1821, a new edn. by Christopher Hibbert, *Memoirs of the Public and Private Life of Queen Caroline*, London, 1978, p. 160ff. W. Dodgson Bowman, *The Divorce Case of Queen Caroline, An Account of the Reign of George IV and the King's Relation with other Women*, London, 1930, p. 198ff. Alison Plowden, *Caroline and Charlotte, The Regent's Wife and Daughter 1795-1821*, Sidgwick and Jackson, London, 1989. その他近年の諸論文として拙稿「キャロライン王妃事件とイギリスの近代史」、『イギリス王室と民衆・世論』、『史窓』（京都女子大学史学会）『五七号（二〇〇一年）』を参照。

② F. A. Smith, op. cit., p. 9ff. F. Fraser, op. cit., p. 304ff. W. Dodgson Bowman, op. cit., p. 190ff. *Hansard's Parliamentary Debates*, Second Series, vol. 3 (1820), 966-970.

③ F. Fraser, op. cit., pp. 347-348.

④ Ibid., p. 342-343.

⑤ Joseph Nightingale, new ed., op. cit., p. 160ff.

⑥ William Hazlitt, "Common Places", no. 23, 1823, *The Complete Works of William Hazlitt*, ed. by A. R. Wallen and Arnold Glover, 12 vols. London, 1904, vol. 2, p. 554.

⑦ *Hansard's Parliamentary Debates [HPD]*, vol. 3 (1820), 1744-1746.

⑧ *The Times*, 7 June, 1820, pp. 2-3. E. A. Smith, op. cit., pp. 31-32.

⑨ *The Times*, 13, 17 June, 1820. J. Ann Hone, *For the Cause of Truth, Radicalism in London 1796-1821*, pp. 309-312. J. Nightingale, p. 180ff. F. Fraser, pp. 383-384.

⑩ ジャーターラー事件について次を参照。Donald Read, *Peterloo: The*

- "Massacre" and Its Background, Manchester U.P., 1958. Samuel Bamford, *The Autobiography of Samuel Bamford*, ed. by W. H. Chaloner, London, 1967. John Belchem, "Orator" Hunt: *Henry Hunt and the Working-Class Radicalism*, Oxford, Clarendon Press, 1988. Robert Reid, *The Peterloo Massacre*, Heinemann, London, 1989.
- ㊦ David Johnson, *Regency Revolution, The Case of Arthur Thistlewood*, Salisbury, 1974, pp. 99ff. 142ff. etc.
- ㊧ E. A. Smith, pp. 44-45.
- ㊨ *HPD*, vol. 1 (1820), 1147-1161.
- ㊩ *HPD*, vol. 1, 866-867.
- ㊪ *HPD*, vol. 2, 207-216.
- ㊫ *HPD*, vol. 1, 1938-1939.
- ㊬ *HPD*, vol. 2, 214-216, 306-307.
- ㊭ *HPD*, vol. 2, 587-588. 欠席を公認せられた議員の名前は次の『タイムズ』に掲載。 *Times*, 18 August, 1820, p. 1.
- ㊮ *HPD*, vol. 2, 612. 「裁判」の詳細については翌日の『タイムズ』に掲載された。また次の書物は「王妃裁判」のほぼ正確な記録である。J. H. Adolphus, *A Correct, Full, and Impartial Report of the Trial of Her Majesty, Caroline, Queen Consort of Great Britain, before the House of Peers; on the Bill of Pains and Penalties*, London, 1820. 459p.
- ㊯ *HPD*, vol. 2, 612, 629-631.
- ㊰ *Ibid.*, 613ff.
- ㊱ *Times*, 18 August, 1820, p. 3.
- ㊲ *HPD*, vol. 2, 651-656ff.
- ㊳ *Ibid.*, 710-741.
- ㊴ *Ibid.*, 741-803.
- ㊵ *Ibid.*, 804. J. H. Adolphus, *op. cit.*, pp. 22-66, 91-92. E. A. Smith, pp. 66-67.
- ㊶ *HPD*, vol. 2, 804-841.
- ㊷ *Ibid.*, 841-874.
- ㊸ *Ibid.*, 882. "Non mi ricordo" は英語の "I do not remember" の意。 "The Queen's Matrimonial Ladder", "Non mi ricordo", "The Radical Ladder; or Hone's Political Ladder and his Non mi ricordo" in Edgell Rickword, ed., *Radical Squibs and Loyal Ripostes, Satirical Pamphlets of the Regency Period, 1819-1821, Illustrated by George Cruikshank and others*, Bath, 1971.
- ㊹ *HPD*, vol. 2, 933-937.
- ㊺ J. H. Adolphus, pp. 91-94. *HPD*, vol. 2, 1331-1339.
- ㊻ *Ibid.*, 889-900.
- ㊼ *Ibid.*, 915-923, 928-932.
- ㊽ *Ibid.*, 937-954.
- ㊾ *Ibid.*, 948-950.
- ㊿ *Ibid.*, 951-958, vol. 3, 1022-1025.
- ① *Ibid.*, vol. 2, 958-969.
- ② *Ibid.*, 969-973.
- ③ *Ibid.*, 975-1087.
- ④ *Ibid.*, 1087-1092.
- ⑤ *Ibid.*, 1099-1103.
- ⑥ *Ibid.*, 1104-1111.
- ⑦ *Ibid.*, 1111-1220, 1221-1234. J. H. Adolphus, pp. 126-152.
- ⑧ *HPD*, vol. 2, 1233-1239.
- ⑨ *Ibid.*, 1258-1261.
- ⑩ *Ibid.*, 1266-1319.
- ⑪ *Ibid.*, 1319-1320, 1331-1339.
- ⑫ E. A. Smith, pp. 58-61, 67-68.
- ⑬ *HPD*, vol. 3, 112-178, 179-255. J. H. Adolphus, pp. 181-221.
- ⑭ *HPD*, vol. 3, 264-291.
- ⑮ *Ibid.*, 300-302, 990-992.
- ⑯ *Ibid.*, 302-303.
- ⑰ *Ibid.*, 303-312.

- ⑤① Ibid., 312-314.
- ⑤② Ibid., 314-326, 379. J. H. Adolphus, pp. 243-248.
- ⑤③ *HPD*, vol. 3, 326-329.
- ⑤④ Ibid., 329-343.
- ⑤⑤ Ibid., 343-363.
- ⑤⑥ Ibid., 363-365, 368-378.
- ⑤⑦ Ibid., 393-394.
- ⑤⑧ Ibid., 394-404, 489-496.
- ⑤⑨ Ibid., 382-386, 390-391.
- ⑤⑩ Ibid., 404-416.
- ⑤⑪ Ibid., 416-435.
- ⑤⑫ Ibid., 426-432.
- ⑤⑬ Ibid., 432-435.
- ⑤⑭ Ibid., 436-446.
- ⑤⑮ F. Fraser, p. 274.
- ⑤⑯ *HPD*, vol. 3, 446-456, 460-489.
- ⑤⑰ Ibid., 496-563.
- ⑤⑱ R. Fulford, p. 274.
- ⑤⑲ *HPD*, vol. 3, 563-571.
- ⑤⑳ Ibid., 571-601.
- ⑤㉑ Ibid., 624-647.
- ⑤㉒ Ibid., 655-667, 688-704, 831-833.
- ⑤㉓ Ibid., 673-678.
- ⑤㉔ Ibid., 716-717, 807-808, 817-831.
- ⑤㉕ Ibid., 833-835, 867.
- ⑤㉖ Ibid., 869-884, 889-914.
- ⑤㉗ Ibid., 918-926.
- ⑤㉘ Ibid., 916.
- ⑤㉙ Ibid., 928-935.
- ⑤㉚ Ibid., 935-956.
- ⑤㉛ Ibid., 982-990.

- ⑤② Ibid., 1022-1025.
- ⑤③ Ibid., 1027-1184.
- ⑤④ Ibid., 1439ff.
- ⑤⑤ Ibid., 1572-1574.
- ⑤⑥ Ibid., 1574-1619.
- ⑤⑦ Ibid., 1698-1701, 1709-1727, 1744-1746.
- ⑤⑧ Ibid., 1702.
- ⑤⑨ *Times*, 11 November, 1820, p. 3. R. Fulford, pp. 242-243, E. A. Smith, pp. 138-139.
- ⑤⑩ *Times*, 14 November, 1820, p. 2, E. A. Smith, pp. 132-133, 139-141.
- ⑤⑪ *Times*, 30 November, 1820, pp. 2-3. Joseph Nightingale, p. 243ff. E. A. Smith, p. 163ff.
- ⑤⑫ Thea Holme, *op. cit.*, pp. 218-219ff. F. Fraser, p. 445ff.
- ⑤⑬ *HPD*, vol. 3, 1746-1747. J. H. Adolphus, p. 458.
- ⑤⑭ フルフォードは「はしなを」において、「キャロライン王妃は無罪なのか有罪なのか、彼女に対する嫌疑は十分に証明されたのか不十分だったのか、議会議法によって彼女を罰する方法は賢明であったのか愚かであったのか、はそれぞれ個人の判断にかかわる問題である。私はそれらの問題に解答を与えるつもりはない」としているが、虐げられた王妃に対するこうした表現自体が一定の偏見に基づいており、本文の随所にもその傾向が見られる。R. Fulford, p. 9 etc.